

Title	プロテスタント宣教師文献とアジアの近代：玉川大学蔵『天道溯原』をめぐって
Sub Title	Protestant missionary document and Asian modernization
Author	中村, 聡(Nakamura, Satoshi)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2016
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.108, No.4 (2016. 1) ,p.675(27)- 684(36)
JaLC DOI	10.14991/001.20160101-0027
Abstract	<p>アヘン戦争に敗北した清朝は、イギリスを始めとした欧米各国と次々と不平等条約を結び、居留地には多くのプロテスタント宣教師も渡来するようになった。彼らはカトリック布教禁止令の下で、教会建設もままならない中、文書による伝道を展開していった。これらの文書の中には、直接キリスト教の教義を説く文書もあれば、西洋の近代科学の紹介書もあった。</p> <p>中国が近代化に苦しんでいた同じ時期、日本でも幕末～明治という近代化の嵐が起こっていた。中国においてプロテスタント宣教師によって著された布教書、近代科学の紹介書は、半年を経ず幕末の長崎に舶載され、日本の近代化にも大きな役割を果たすことになった。</p> <p>After its defeat in the Opium War, China signed unequal treaties with UK and other western countries. As a result, a number of Protestant missionaries began to live in Chinese settlements. At that time, Catholic has been banned in China. Protestant missionaries were also unable to build a church. In such a situation, they began preaching by the writings. In their writings, some documents directly preached Christian teaching, while others introduced western manuals of modern science.</p> <p>At the same time, a storm of Meiji modernization from the Edo period was happening in Japan. In less than six months, books written by a number of Protestant missionaries were ubiquitous in Nagasaki at the end of the Edo period, playing a major role in the modernization of Japan.</p>
Notes	小特集：海の視点からの経済学：学際的検討の試み
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20160101-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

プロテスタント宣教師文献とアジアの近代

—玉川大学蔵『天道溯原』をめぐって—

中村 聡*

Protestant Missionary Document and Asian Modernization

Satoshi Nakamura*

Abstract: After its defeat in the Opium War, China signed unequal treaties with UK and other western countries. As a result, a number of Protestant missionaries began to live in Chinese settlements. At that time, Catholic has been banned in China. Protestant missionaries were also unable to build a church. In such a situation, they began preaching by the writings. In their writings, some documents directly preached Christian teaching, while others introduced western manuals of modern science.

At the same time, a storm of Meiji modernization from the Edo period was happening in Japan. In less than six months, books written by a number of Protestant missionaries were ubiquitous in Nagasaki at the end of the Edo period, playing a major role in the modernization of Japan.

書籍出版の後に発表の依頼があったため、拙著『宣教師たちの東アジア』（2015 年、勉誠出版）の「第一部 1. 『天道溯原』とプロテスタント伝道」に加筆・訂正して報告としたい。

* 玉川大学リベラルアーツ学部

College of Arts & Sciences, Tamagawa University

はじめに

昭和 17 年、旧制興亜工業大学⁽¹⁾の設置準備が行われる中、蔵書点数とその内容拡張を目的として、玉川学園は大量の書物を購入した。古書店数軒の在庫書物をすべて買い取り、以後に追加購入されたものも併せて、現在学園の本館地下書庫に収められている。中でも多くの綫装本、特に往来物と漢籍が、当時本郷の東京大学前に店舗を構えていた木内書店等から購入され、30,400 冊余りの「送品明細書」が図書館に残されている。これらの綫装本のうち、往来物約 4,800 冊については『玉川大学図書・往来物目録』⁽²⁾という名で目録が整備出版され、多くの研究者たちの注目するところとなっているが、こと漢籍については、未だ正式な図書目録が出版されていない⁽³⁾。漢籍の中にあつて注目されるのは、清末に中国に渡来した西欧諸国の宣教師、即ち入華（来華）宣教師たちが中国において発行したキリスト教関係、あるいは近代科学関係の書物である。筆者が散見しただけでも、50 種を超えるものと考えられる⁽⁴⁾。中には、薩摩藩藩校で教科書として使用されていたと思われる『航海金針』⁽⁵⁾などという非常に珍しい版本も存在するが、今回は、現在まで存在が報告されていない『天道溯原』について報告する。

一 『天道溯原』とプロテスタント伝道

『天道溯原』は中国プロテスタント伝道開拓期の代表的な著作の一つともいべきもので、文章の格調が高いことや、中国の古典引用の豊富なことは、それ以前のキリスト教布教書には類を見ないものである。キリスト教証拠論は、キリスト教の理論的証明をその目的とするが、作者マーティンは西洋科学を援用しつつ論述を展開している。『天道溯原』の文章および内容に於けるこのような特色は、本書が中国知識人を対象として執筆されたものであることを推察させ、本書の普及は中国プロテスタント伝道の漸進的な発展を象徴するものであるとともに、清末思想家の啓蒙思想に少なからぬ影響を与えたものと考えられる。

また、日本には幕末に輸入され、明治になって中村正直が訓点を施し、また新島襄とともに同志

(1) 現在の千葉工業大学。

(2) 『玉川大学図書・往来物目録』玉川大学図書館編、昭和 56 年。

(3) 『玉川大学漢籍目録』という目録稿が平成 2 年に仮作成されているが、一部に読みの誤りや未整理もあり、現在正式な刊行に向けて整備されつつある。

(4) 江戸時代の藩校や明治時代に教科書として扱われたものは漢籍とは別の分類がなされているため、これらの中の入華宣教師の編著を入れると、さらに多種の物が出てくると思われる。

(5) 『航海金針』Macgowan, Daniel Jerome 漢名〈瑪高温〉(1814~1893)によって 1853 年に書かれた漢訳航海気象学書で、薩摩藩の藩士の教科書となった。

社大学創設に尽力した山本覚馬によってその内容が取り上げられ、明治初期におけるプロテスタント伝道に大きな役割を果たした。キリスト教およびプロテスタント反対派や、仏教徒などからもその内容に反駁する著作が出版されるなど、その波紋は予想以上に大きかった。

作者である Martin, William Alexander Parsons (1827~1916) は漢名を〈丁韞良〉といい、長老会所属のアメリカ人宣教師である。1850年中国に渡り、寧波で伝道に従事し、同地で長老会の事業の起訴を固めた後、北京に進出、ブルドン Burdon, J.S., シェルシェウスキー Scherschewsky, S.I. から他派宣教師と共に聖書漢訳委員会を組織した。1870ないし72年ころにこの委員会による官話聖書が公にされ、その中国語に対する知識と学識が買われて、マーティンは1869年京師同文館の総教習に任ぜられた。西洋科学の導入に大いに尽力したが、彼個人の大きな貢献としては、アメリカの法学者ホイートン Wheaton, Henry の書いた“Element of International Law”の漢訳『万国公法』がある。98年京師大学堂が創設されると、その総教習となった。1900年いったん帰国し、ついで武昌に英米系の資金で新大学を創設するため、再び中国に渡った。この間、清朝政府の法律顧問を務めたので、政府から高級官吏の待遇を受けた。

寧波におけるマーティンの伝道活動には特徴があった。それは伝道する相手、即ち聴衆に即応した伝道方法をとっていたことである。寧波市内の収容人数200名程度の小さな教会には、その日の仕事を終えた職人たちや肉体労働者といったブルーカラーの人々が集まって来る。このような場合、マーティンはイエスの喩え話などを分かり易く説明し、これによってキリスト教への導きとしている。この方法は、嘗て仏教僧が民衆を相手に辻説法していた歴史を髣髴とさせるが、この説教方法はかなり好評であったようで、聴衆の中からは「説教は観劇よりおもしろい」という声も聞こえた。マーティンは自身の見解を述べるだけでなく、聴衆と議論を行うなど、聴衆の意向を適確に把握したものだと考えられる。このような伝道の方法から1858年に生まれたのが『勸善諭道伝』というキリスト教説話集であり、16のキリスト教説話とその各々に付随した解説兼信仰の勧めによって、キリスト教の教義の一端を解説している。

これに対して、寧波市内の大きな教会には儒者や仏教僧、あるいは道教の道士などの知識人が多く集まり、これらの聴衆に対してマーティンは説教の題材として高次元な内容を示し、キリスト教擁護論やキリスト教証拠論などを展開していった。中国知識人にキリスト教を理解させるためには、中国古典の理解、特に儒教的教養の習得が宣教師にとって必須のものとなった。マーティンもこの方面の勉学に力を入れ、早くより中国古典の学習を心がけ、中国知識人に匹敵する高度な教養を身につけており、これを基にキリスト教神学を中国知識人に適合する文章と内容をもったキリスト教証拠論として著した。それが『天道溯原』である。

中国におけるプロテスタント伝道の始まりは1807年モリソン⁽⁷⁾の渡来に始まると考えられるが、そ

(6) American Presbyterian Mission North.

の後の伝道活動の展開はいくつかの段階に分けられるであろう。ここでは仮に四つの段階に分けて考えたい。第一期は1807年から1860年、即ち北京条約締結の年までである。これは宣教準備の時期と考えられ、国家権力が弱体化し、社会不安が増大する中で、太平天国の乱が起こり、アヘン戦争以後、欧米諸国の勢力が進出し、南京・天津・北京の諸条約と所謂不平等条約が次々と結ばれて、清朝の衰退が加速された時期であった。第二期は、1860年から1900年の義和団の乱までである。この時期には多くの外国勢力が中国に入り、キリスト教会の建設が盛んに行われた。第三期は、1900年から1949年の中華人民共和国成立までで、この時期は、教会勢力の発展時期と見ることができる。そして、第四期は、1949年以後ということになる。この時期は、共産主義国における教会組織が作られた時代であると捉えられるが、改革開放政策が実施されてから以後を第五期と捉えることも必要になってくるかもしれない。

このうち第一期は、さらに前半と後半とに分けることができる。その境界となるのが1842年の南京条約である。キリスト教（カトリック-天主教）の布教が「典礼問題」によって、1722年以來禁止されていたため、⁽⁸⁾ 文書伝道に重点を置かざるを得ない状況であった。モリソン、⁽⁹⁾ ミルン、⁽¹⁰⁾ マーシュマン、⁽¹¹⁾ ギュッツラフなどによる聖書漢訳、ミルンの『張遠両友相論』に代表される布教書の刊行、あるいは『書経』の英訳など、中国語や伝統文化の調査研究を進めながら、キリスト教の紹介書を用意した布教準備の段階が第一期前期である。それに対して後期は、欧米諸国の力の誇示がその裏づけとなる技術、あるいは精神的基盤となる文化・宗教に関心を向けた時期であり、さらに南京条約によって外国人の居住が認められた五港と英国領香港に、東南アジアを根拠地としていた宣教師たちが移住し、次々と伝道所や学校、病院などを設立していった時期である。

『天道溯原』が出版されたのは1854年であるから、この四つの段階のうち、第一期後期に当たる。⁽¹²⁾

二 中国語版『天道溯原』の系統分類とその特色

『天道溯原』の初版は1854年に寧波で刊行されたわけであるが、初版及び第二版は実物の残存が

(7) Morrison, Robert 漢名〈馬礼遜〉(1782~1860) アメリカの宣教師。

(8) 清初も明末に引き続いて耶穌会の布教が行われ、康熙帝のころには、雲南・貴州を除いて全省に天主堂が建てられた。しかし、耶穌会が中国の風習を尊重して布教していたのが異端とされると（典礼問題）、康熙帝は耶穌会以外の各派の布教を禁止し、ついで雍正帝は、キリスト教の布教を全面的に禁止して宣教師を国外に追放した。

(9) Milne, William 漢名〈米憐〉(1785~1822) イギリスの宣教師。

(10) Marshman, Joshua 漢名〈馬子曼〉(1768~1837) イギリスの宣教師。

(11) Gutzlaff, Karl Friedrich August 漢名〈郭實獵〉(1803~1851) ドイツの宣教師であるが、後にイギリスの役人になった。

(12) 翌年の1855年には、Hobson, Benjamin 漢名〈合信〉が『博物新編』を出版しており、この両書のキリスト教神学についての思想的比較を行う必要があると考えられる。

確認されておらず、現在の段階では、第三版以降のものが研究の対象となっていることを、先ず知っておく必要がある。ただし、国外、特に中国本土、台湾に初版本、第二版本が残存している可能性はある。ただ、『天道溯原』がキリスト教伝道のための書籍であり、一般民衆の手に介されることを目的としているため、図書館や資料館等に保管されている可能性は、他の思想文献よりは低いのではないかと推察される。

吉田寅氏の版本考察によると、1867年版は、1860年版を若干改訂しているものの、文章はほとんど同じであり、1869年版、72年版、87年版もそれを踏襲したものだと考えられ、ここまでが一つの系統に属するものであると思われる。さらに、1899年、1917年版は増補、注釈を加えた改訂版に当たり、最近の1967年版は、⁽¹³⁾1917年版の系統に属するが、同系統の版本が他にもあり、そちらの方が原本であったのではないかと、と思われる。

今回、玉川大学図書館に所蔵が確認された版本の出版年は1908年で、出版元は上海美華書館である。1899年、1904年と続けて同じ出版社からの出版が続いていることから、この版本も増補、注釈を加えた改訂版の系統に属するものであると思われる。しかし、これら二本と大きく異なるのは葉数である。玉川大学所蔵本は、1899年版の二倍近くの葉数になっている。だが、葉数の異動は他の同じ系統の版本の中にも例が見られる。この原因として考えられることは、前述したように、この本がキリスト教伝道のための著作であり、書物としてよりは、教会に置かれる伝道用冊子としての意味合いを強くもっていたため、印刷（影印）、配布する教会によって、文字の大きさ、葉数が時々変化したのではないかと考えられるのである。

上巻第一章「以星宿爲證」⁽¹⁴⁾の書き出し部分から、以上のことを検証することができる。現存する最古の版本である1860年版本の、「神無形體可見（神は形体の見るべき無し）」の「神」の部分が、1867年、1869年、1872年版は「天主乃神（天主乃ち神）」と変化し、1899年版は「上帝乃神（上帝乃ち神）」となり、1908年、1917年版では「上帝乃靈（上帝乃ち靈）」となっており、現在手に入る1967年版は「眞神乃靈（眞神乃ち靈）」となっている。この「神」の訳語の変遷が、前述した系統分類に一致していることは明らかである。玉川大学所蔵本は、「上帝乃神」と記されていることから、やはり1899年、1904年と同じ系統のものと考えてよいであろう。

このような用語の変遷は、用語論争の影響から、訳語が確定されない状況の中で、訳語を変え、修飾語を付加し、中国語元来の意味との誤解を避け、より意味を限定させる意図があったものと思われる。

(13) 『天道溯原』丁韋良著、文泉出版社、中華民國56年。現在手に入る唯一の版本である。

(14) 1967年版本は、章名が「以三光爲證」となっている。

三 God の翻訳用語問題 (term questions) と儒教思想との融合

耶穌教 (Protestant) が中国で伝道活動を行うに当たっては、いくつかの難しい問題を克服しなければならなかった。後に述べる「神」という概念を理解させることが、その最も重要な問題であったが、その前段階として、God を中国語でどのように表現するかという問題があった。天主教 (Katholiek) が典礼問題が拗れたことにより布教禁止の処分を受けた経緯から、同じ翻訳語を使うと天主教と混同され、布教活動に影響が出ると考えたプロテスタント宣教師たちは、「神 (Deus) = 天主とせよ」というローマ法王庁からの指令に従おうとはしなかった。しかしながらこの用語の問題は、キリスト教諸派による宗教儀礼や宗教行事の差異が、中国における伝道方法にそのまま持ち込まれ、キリスト教各派の確執が問題となって起こった典礼問題とは全く異なり、純然たるプロテスタント各派の宣教師間の伝道に関する問題であった。

この用語問題はその起源をたどっていくと、1819 年 4 月号の “The Indo-Chinese Gleaner”⁽¹⁶⁾ 紙上に、匿名の一投書家が、「英語の God を如何なる漢語に翻訳すべきか」という疑問を發したことに始まると考えられる。それから 2 年後の 1821 年、同じ雑誌に Z と署名した寄稿家が、「『神』という概念を表示すべき漢字について⁽¹⁷⁾」と題して、「上帝」とか「神」とかいう文字についての批判を行っている。しかし、この問題がもっとも盛んに論じられるようになったのは、ブリッジマンが 1830 年代以前に完成された漢語訳『聖書』の解説と批判とを公にし、さらに 1836 年に至ってギユッツラフが⁽¹⁸⁾ 当時現存していた漢文訳『聖書』改定の急務を論じた結果、1840 年前後からこの用語の問題が在華宣教師等の重大な問題となっていったためである。

天主教では既に述べたように、「神」という概念を表示するには「天主 (Deus)」を使用すべきことがローマ法王庁から指令され、「天主」以外の言葉は絶対的に禁止されていた。したがって「天帝」という文字も違法であり、「神」という文字も反則であり、「眞神」も「上帝」も一切許容されない。徹頭徹尾「天主」でなくてはならないのである。もしこの禁を犯す者は、天主教としては宗教上の制裁を免れることはできなかったのである。これに反して烏合無統制の入華プロテスタント各派では、プロテスタントという面目維持の上から、中国では天主教の用語をそのまま採用して、自らを

(15) 例えば、キリスト教に入教するに当たって、浸礼主義、即ち全身を水に投ずる主義を奉じる各派は、洗礼主義即ち灌頂式を許容する各派を攻撃したとか、安息日 (一週の第七日 = 土曜日) を厳守する一派は、日曜日 (週の第一日) を守る諸派を非難した、というような例が挙げられる。

(16) 当時のプロテスタント宣教師の機関雑誌。

(17) “Some remarks on the Chinese terms to express the Deity”.

(18) Bridgman, Elijah Coleman 漢名〈裨治文〉(1801~1861) アメリカの宣教師、ジャーナリスト、中国学者。モリソンと協力して “Chinese Repository” 誌を發刊した。

(19) 注 (11) 参照。

「天主教」と称することはできない。しかのみならず、このような僭称または詐称をすることは、天主教側でも決して許容しない。よってプロテスタントではモリソンがウィリアムス⁽²⁰⁾の意見を入れて、先ずプロテスタントを「耶穌教」と称し、天主教と区別することにしたが、第二には「眞の神」を表示するのに「天主」の二字を採用することとはプロテスタントの沽券にかかわるところもあって、まったく「天主」の文字を使用することを避けたのであった。このようなことから、なるべく God を「神」または「上帝」もしくは「天帝」のことはを使って表示するようになったので、ここにプロテスタントの宣教師たちの間に、「神」説・「上帝」説・「天帝」説・「眞神」説等が起こってきたのである。また極端な論者になると、唐時代の景教徒が使用した「阿羅詞 (Aloha)」を採用すべきだという者もあれば、ギリシャ語の「テオス」の頭文字である「Θ」を漢字のようにして使用すべきであると唱える者も出てきた。これは、天主教が「斗⁽²¹⁾字⁽²¹⁾斯 (Deus)」または「提字子」を用いたのと同工異曲であると考えられる。

この用語問題の絶頂期は 1850 年であったとって良いであろう。モリソン、ミルン、マーシュマン、ブーン⁽²²⁾等は「神」説の代表者である。彼らの主張によれば、漢字の「神」はギリシャ語の「テオス (Θεός)」に該当するというわけである。これに反してメドハースト⁽²³⁾、ギユッツラフ⁽²⁴⁾、レッグ等は、「上帝」の文字は眞の神 God を表示し、「神」はいわゆる「余神」即ち God でないところの諸神を表示する文字であると主張した。

それでは、『天道溯原』の作者であるマーティンは「神」をどのように表現しているのでしょうか。「其の謂ふ所の天は、蒼蒼の天に非ず。乃ち宇宙の大主宰なり。其の性は則ち聖にして知るべからず。之を称して神と曰ふ所以なり。世人嘗て人鬼を奉じて以て神と爲すに因り、故に又之を別ちて眞神と曰ふ。其の位は則ち至尊にして対無し。之を称して帝と曰ふ所以なり。世間亦た君主を尊びて以て帝と爲すに因り、故に又之を別ちて上帝と曰ふ。其の心は則ち生を好むを徳と爲す。創めて人類を造る。万世の人、之を以て本と爲さざるは無し。之を称して父と曰ふ所以なり。世人生身の父有らざる莫きに因り、故に又之を別ちて天父と曰ふ。」⁽²⁵⁾

(20) Williams, Smuel Wells 漢名〈三衛畏〉(1812~1884) アメリカの代表団秘書であり、同時に宣教師でもあった。

(21) 当時の廣州駐在英國領事ボーリング (Bowring, John) が『チャイニーズ・リポジトリ』の 1849 年 11 月号に発表した「中国語で神という言葉を表示する方法についての考察」では、基本的主張として、中国に於ける「神」の表記方法として、ギリシャ語の「Θ」を提案している。キリスト教の「神」という全く新しい概念を伝えるためには、手垢に汚れた中国語の中に適語を求めるのではなく、新しい術語の定着を図った方が望ましいと考えている。

(22) Boon, William Jones 漢名〈文〉(1811~1864) アメリカの宣教師。上海に聖約翰 (セント・ジョン) 大学の基を開いた。

(23) Medhurst, Waltter A. 漢名〈麥都思〉(1794~1857) イギリスの宣教師。漢文の著書約 60 種。他に英華、華英辞典や福建語辞典を著している。

(24) Legge, James 漢名〈理雅各〉(1815~1897) イギリスの宣教師。マラッカで英華書院を興し、後香港に移った。1875 年よりオクスフォードの中国学教授となり、中国古典の訳注で知られている。

マーティンには、「神」の用語について、多義的な「天」の観念と対応させようとする姿勢が見られる。中国の古典的な「天」または「上帝」にキリスト教的絶対神観に近いものを見出すにしても、「天道」や「神」を語らない孔子の思想を継承する儒教思想に於いては汎神論的な神々が容認され、宗教は政治道徳世界に於ける家父長的權威の絶対性を支える忠孝倫理に隷属するものであった。それ故、キリスト教的「神」観を儒教的「天」観といかに融合するかが大きな焦点となった。

「天」は元来中国では自然運行の「天」、主宰・根拠の「天」、生成調和の「天」、道徳・理法の「天」と、主宰的な「天」と条理（＝法則）的な「天」とが多義的に複合された観念として捉えられている。そこに唯一絶対の創造主であり人格神である「キリスト教の神」を掲げるには、知識人階級の思想として根強い力をもつ宋学の理気世界観と対決しなければならない。朱子は、

「夫れ天は之を專言すれば則ち道なり。（中略）分かちて之を言へば形体を以て之を天と言ふ。主宰を以て之を謂へば帝。功用を以て之を謂へば鬼神。妙用を以て之を謂へば神。性情を以て之を謂へば乾⁽²⁶⁾」

として、主宰的・人格的「天」の存在を容認しているが、人間を創造し、支配する超越的な絶対神として捉えていたわけではない。人倫・事物の当為の道理の根拠として、即ち理体の究極原理として「天」を理解したのだと考えられる。そこには、キリスト教とは異質の人間中心の現実的生を肯定した伝統的な人間観がある。

しかし、宋学は儒教の伝統主義、修身・齐家・治国・平天下の理、思弁主義を特徴とするが、「即物窮理」的学問的態度、「太極図説」に象徴される宇宙・万物の生成を「気」の自己運動によって捉える自然科学的アプローチは、論証を中心とする学説を受け入れやすく且つ「性即理」説（宇宙万物の法則である理が人間にも内在しており、人間の本質である道徳性の根拠になる）は、性善説を発展させたものとして、けっして矛盾するものとはならないと考えられた。

「或るひと曰く、『此の道を信従するは、孔子に背くこと母きを得んや』と。知らず、儒教五倫を言ひて、耶穌の道は神人を以て五倫の上に加ふ。神人既に和して、五倫の人、自ら各々其の序を得。儒教誠正を言ひて、耶穌の道は祈禱に頼りて以て誠正の本を端しくす。⁽²⁷⁾」

「儒教は孝悌を言ひて、耶穌の道は人をして天父を孝敬し、父母を孝養し、悌道を以て人と相酬酢^{しゅうさく}（勤める）せしむ。且つ一愛を以て孝悌の原を探る。神、人既に愛して孝悌の事直ちに天

(25) 『天道溯原』〈引〉「其所謂天。非蒼蒼之天。乃宇宙之大主宰也。其性則聖而不可知。所以稱之曰神。因世人嘗奉人鬼以爲神。故又別之曰真神。其位則至尊無對。所以稱之曰帝。因世間亦尊君王以爲帝。故又別之曰上帝。其心則好生爲德。創造人類。萬世之人。無不以之爲本。所以稱之曰父。因世人莫不有生身之父。故又別之曰天父。」

(26) 『朱子語類』卷六八〈賀孫〉「夫天專言之則道也。（中略）分而言之以形體謂之天。分而言之以形體謂之天。分而言之以形體謂之天。以功用謂之鬼神。以妙用謂之神。以性情謂之乾。」

下に達すべし。是を以て之を言へば、儒教と耶穌と、其の道は広狭を分かつも、邪正を分かつ
ず。安くんぞ背くと云ふを得んや。⁽²⁸⁾」

儒教的学識を活用しつつ、マーティンは儒教思想を全面否定せず、広狭の差でキリスト教の優越性を説明したのではなからうか。

まとめに代えて

今回、玉川大学が所蔵する『天道溯原』について報告した。それは、まだ報告されていない版本であるが、1899年版、1917年版と同じ出版社から出版され、かつ上巻第一章の書き出し部分の文字の並びからして、現存する最古の版本即ち1860年版本に増補、注釈を加えた改訂版の系統に属するものであった。

その中には用語問題に翻弄されつつも、「神 (God)」の観念を中国人に植え付けようとした著者マーティンの努力の跡が見え、「神」の概念は宋学との対決にまで及んでいると思われる。今後、『天道溯原』の中に見える中国思想との対決と融合を分析し、清末に入華したプロテスタント宣教師がどのようにキリスト教を伝道していったのかを明らかにし、清末思想との関連を考えていく必要があるであろう。

そのとき、次の二点が問題になるのではないと思われる。第一点は、コーエンの考え、即ち「一つの改革正当化論は、西洋の学問の源流が実は中国にあるという主張である。はるか以前に中国人は、仏教を受容することを正当化するために『化胡論』を唱えたことがあるが、この正当化論はまさに清末の『化胡論』であった。(中略) こうした附会論的発想は、いくつかの機能を持っていた。第一に、中国の文化的誇りを傷つけることなく、西洋に倣った変革を正当化することができた。第二に、中国人は人種としては決して西洋人よりも知的に劣ってはいないということを、中国人に対し改めて保証した。」ということであり、第二点は、レベンソンの「『真 (true) である』ことと『自己のもの (mine) である』ことが共に証明されないかぎり、西洋のものを受け容れなかったということである。『真である』とは、それが普遍的価値基準に照らして優れていることを意味し、『自己のもの』とは、それが中国にもともと備わっている (もしくは、備わっていた) ことを意味する。西洋のものについて、単に優れていることが証明されただけでは不十分で、同時に本来中国にも備わっていたことが証明されないかぎり、中国人は究極的に受け容れようとはしなかった。」ということである。

(27) 『天道溯原』〈中巻第七章〉「或曰信從此道得毋背於孔子乎。不知儒教言五倫。而耶穌之道以神人加於五倫之上。神人既和而五倫之人。自各得其序矣。儒教言誠正而耶穌之道頼祈禱以端誠正之本。」

(28) 『天道溯原』〈中巻第七章〉「儒教言孝悌。而耶穌之道令人孝敬天父孝養父母以悌道與人相酬酢。且以一愛探孝弟之原神人既愛而孝悌之事直可達於天下矣。以是言之儒教與耶穌其道分廣狹不分邪正。安得云背。」

ある。今後の解明が待たれる。^{(29) (30)}

要旨: アヘン戦争に敗北した清朝は、イギリスを始めとした欧米各国と次々と不平等条約を結び、居留地には多くのプロテスタント宣教師も渡来するようになった。彼らはカトリック布教禁止令の下で、教会建設もままならない中、文書による伝道を展開していった。これらの文書の中には、直接キリスト教の教義を説く文書もあれば、西洋の近代科学の紹介書もあった。

中国が近代化に苦しんでいた同じ時期、日本でも幕末～明治という近代化の嵐が起こっていた。中国においてプロテスタント宣教師によって著された布教書、近代科学の紹介書は、半年を経ず幕末の長崎に舶載され、日本の近代化にも大きな役割を果たすことになった。

キーワード: アジアの近代, プロテスタント宣教師, 文書伝道, 漢訳西洋近代科学書

(29) 『知の帝国主義』Cohen, Paul 著, 佐藤慎一訳, 平凡社, 1989年。

(30) “*Liang Ch’i-ch’ao and the Mind of Modern China*” Levenson, Joseph R. (Cambridge: Harvard University Press, 1953).